

国際関係論における「ジェンダーの視点」の意義

ロニー・アレキサンダー*

プロローグ

本稿の執筆は、『国際関係論のパラダイム』（初瀬龍平他編）の中の一章、「ジェンダー：国際関係論の研究においてジェンダーの視点がなぜ重要か」としてはじまった。その後、学生に読んでいただき、彼らの意見に基づいて書き直した結果、ずいぶん長くなり、内容も幾分か変わった。しかし、出来上がった論文を発表したいと思いはじめたとき、大きな問題が生じてしまった。それは、この数年の間、ジェンダー研究を続ける中で、自分の考え方が少しずつ変わってきたことに原因があると思われる。私の考えに変化をもたらした問題とは、「ジェンダー」という概念が持つ矛盾に気付いたということである。つまり、私は今まで簡単に「ジェンダー（あるいは性別）二元論」に基づくジェンダーおよび性別二項対立を受け入れていたが、気が付いてみると、生物学的にも社会的にもジェンダー・性別を簡単に「女性（あるいは女）」もしくは「男性（あるいは男）」¹に分けることが不可能な場合もあることに気付いたのである。つまり、私たちが当然のこととして考える男（男性）・女（女性）という二項対立を疑いはじめた結果、「女性・女」「男性・男」の意味がわからなくなると同時に、それらのカテゴリーを作る意味もわからなくなってしまった。その結果、私たちの世界を説明するのに、「ジェンダー」という概念の有効性を新たな角度から問うようになったわけである。

1 本稿において、生物学的な「性」を「女」「男」で表現し、社会的な「性」（ジェンダー）を「女性」「男性」を用いて表現する。

* 神戸大学大学院国際協力研究科教授

もう少し詳しく説明しよう。知らない人を見るとき、主に外見から判断してその人をまず「女性」（あるいは女）か「男性」（あるいは男）かを見て、そのジェンダーのつもりで接するのが一般的だろう。しかし、その判断は必ずしも正確とは言えない。ただ単に男を女に間違えたり女を男に間違えたりすることもあるが、もともと男でも女でもない人もいる。また、どちらのカテゴリーも外からみると「女性」か「男性」に見えるかもしれないが、実際は、どちらもが生物学的にも社会的にも多様性に富んだものである。例えば、一般的なイメージで「女」の体をしている人で実は遺伝子的にいうとXY型男性の人（インターセックス²の一つの形態）、男性の体をしているけれど本人は女性だと思っている（性同一性障害³）など、いろいろな人がいる。すべての人を二つないし三つのジェンダー・性別（女、男、第3の性⁴）に押し込むには

相当無理がある。

これらのジェンダー・性別の多様性および相対的關係を明示したものが図1である。図1を見ると、例えば男らしさにこだわる生物学的な女、女らしさにこだわらない生物学的な男などの存在を区別できる。同時に典型的なXX型女と典型的なXY型男の間のグラデーションも確認できよう。また、社会による影響は受け止め方や対応が人や状況によって異なり、とりわけ一人のとき（本音）と社会に出るとき（建前）に性・ジェンダーの表現が異なる場合もあるので、図1を(a), (b), (c)に分けることにした。

この図を参考にすると、ジェンダー・性別の多様性が見えるはずである。そういうふうに見ると、人間を二つの「ジェンダー」あるいは「性別」に分ける意味があるかどうかかわからなくなる。もしも意味がなければ、本稿も無意味になる。意味があるとすると、二つのジェンダー・性別に入らない人たちをはじめ、カテゴリーとしての女性（女）と男性（男）をどのように説明すればいいだろうか。

このようにカテゴリーとしてのジェンダー・性の意味を問うことによって、一般的に議論されてこなかったことまでもが視野に入る点に、意義を見出すことができる。しかし、社会のレベルで考えると、実際の世界にはジェンダーや性別の多様性は存在するのに、規範

in in a *Postcolonial World*. Cambridge University Press. 特に第4章 “Sexual Identity: Western Imperialism?” を参照されたい。）

2 半陰陽者のこと。これについては例えば橋本秀雄(2000年)『性のグラデーション——半陰陽児を語る』(青弓社)がわかりやすい。

3 体の性と心の性が一致しない人たちは「性同一性障害」に含まれるが、色々なタイプがある。服装などを異性のものにする人(トランスヴェスタイト)、異性の社会的役割を果たしたい人(トランスジェンダー)、心と体を統一するために性転換手術をする必要を感じる人(トランスセクシュアル)もいるし、手術の必要を感じない人もいる。「女」か「男」かという二項対立に基づく社会構造は、とくにこの人々の自由を制限する。このことについて、吉永みち子(2000年)『性同一性障害：性転換の朝』(集英社新書)を参照されたい。

4 インドのヒジュラ(hijra)、ポリネシアのマフ(mahu)、ネーティブ・アメリカンのベダークケ(bedarche)などが示すように、世界には「性」を男と女だけではなく、それらと違う性役割を認めている社会がある。これらの役割を総称として「第三の性」と呼ぶことにしよう。(Bulbeck, Chilla (1998). *Re-orienting Western Feminisms: Women's Diversity*

としての「ジェンダー」や「性別」は依然として二項対立的な女性・男性（女・男）に基づいており、どちらのカテゴリーにも入らない人を無理やりに入れようとするのが一般的であろう。生まれたときに性別が不明な子供たちに、はっきりした性別を与えるための手術等を行うことがこのことを示している。社会を管理する立場に立てば、異性愛を中心に性別・ジェンダー二元論に基づく社会（結婚制度、相続制度など）が管理しやすいであろう。しかし、多様なジェンダーと性を認識せずにいると、多くの人の人権を無視することになるし、社会や個人の人生の豊かさを制限することにもなる。逆に、ジェンダーと性別の多様性を認識すると、今度は例えば「女性」を特定なジェンダーまたはグループの総称として使えなくなる。その論理を辿っていくと、カテゴリーとしての「女性」が存在しなければ、女性の権利等について議論することができなくなる。これも困る。

私は、ジェンダーや性別は多様なものであると認識しており、ジェンダーに関する二元論的アプローチを否定する。もちろん、多くの人は自らの性別とジェンダーを何も違和感をもたずに体（性器）を中心に判断する。しかし、階層、エスニシティ、セクシュアリティ等を超え、すべての「女性」（あるいは男性）を一つのまとまったものとして扱うことには無理があると思う。誰もが女もしくは男であるという前提にも問題があるし、女と男しかなくて、どちらかである限り、そのカテゴリーに入る他の人たちと同一であるというこ

とも問題があるからである。

では、分析概念として二項対立的なジェンダー・性別のカテゴリーは使えないのだろうか。使用するとすれば、その内容を定める必要がある。上述したように、社会レベルで考えると、ジェンダー・性別二元論は主流である。しかも、その中で、女性というジェンダーは男性というジェンダーより不利な立場に立っていることが多い。しかも国際関係論という学問分野において、ジェンダーの視点、とりわけ女性の視点が確かに欠けているように思う。それを考えると、ジェンダー・性別に着目する意味があるように思われる。ジェンダー二元論も性別二元論も否定するが、カテゴリーそのものを否定するわけではない。問題は、それらのカテゴリーの中身を誰がどのようにして決めるかということであろう。しかも、特にジェンダーというカテゴリーの中身は文化等によって異なるので、カテゴリー化が困難な場合もある。

アマルティア・センは開発に関する議論の中で「自由」を中心的な概念として用いている。「自由」の中身には、経済的機会、政治的自由、社会的効用、透明性の保障、安全などの要素がある。⁵ このように自由を開発プロセスの中心概念としてもってくることによって、文化的多様性をダイナミックに捉えることができる。ジェンダーの表現や捉え方も文化によって異なるので、ジェンダー平等を自由へのアクセスとして考えるとヒントになる。

5 Sen, Amartya. (1999) *Development as Freedom*, Anchor Books, p.xii.

センは、「女性」は「男性」よりも色々な意味で自由が制限されているということを指摘している。そして、「女性」の自由が制限されているのであれば、「男性」も真の自由な状態にはなれない。しかし、センは、自由へのアクセスに関するジェンダーに基づいて分析こそしているが、ジェンダー・カテゴリーの中身（誰が女で誰が男か）については言及していない。従って、センの分析によると、ジェンダー・性別に基づく分類において、不平等が存在するという事は確かであるが、その不平等の損得の影響は具体的に誰に及ぼされているかについては明確ではない。

以上のことを考慮すると、本来の「ジェンダー」の文脈は現実を説明するのに不十分ではあるが、不十分でありながらも、本来の「ジェンダー」概念を用いて現に起こっている不平等を説明できる。そう考えると、本稿において国際関係論におけるジェンダーの視点の導入について検討することは無意味ではないであろう。問題はどのジェンダー・カテゴリーを利用し、誰がそれらに入るか、ということである。

そこでとりあえず、次のようにこの問題解決を図りたいと思う。社会構造はジェンダー・性別二項対立に基づくものであるために、本稿において、あえて特定しない限り、ジェンダー二元論に基づいた女性、男性という二つのジェンダー・性別カテゴリーを用いて議論を進めることにする。次に、誰が入るかということだが、社会には「女性として生きている」人たちと「男性として生きている」人た

ちがいる。この人たちのなかで、生物学的にも社会的にも女性・男性のカテゴリーに入る人は、入らない人に比べて圧倒的に多いだろう。その人たちの場合、例えば「女性として生きている人」は女性であり、女である。しかし、そうでない人もいる。本稿において、「女性として生きている人」を基本にして、「女性」と呼び、「男性として生きている人」を「男性」と呼ぶことにしよう。つまり、女性・男性のカテゴリーは「自己申告」に基づくものとして考えることにする。このことを明示したのは図1(c)である。本稿の分析には直接的に触れないが、女性（男性）として生きている人々以外の人については、無理やりにカテゴリーに入れないで、ジェンダー・カテゴリーは二つ以上あるということ認識しつつ、本来の女性・男性というカテゴリーを中心に論じる。多様なジェンダー・性別の存在をどのようにして用いればいいかについては、クイアセオリー(queer theory)⁶の研究を参考に今後も続けて考えたいと思う。

I ジェンダーの視点の意味と意義

新聞の一面に、行進中の軍隊のカラー写真が載っている。軍人たちがみなキルトではなくて、花模様のひらひらのスカートを着用して歩き、真っ赤な口紅をつけていたとしたら、たいていの人は笑って、軍人らしくない

6 ジェンダー、セクシュアリティ等のアイデンティティが固定されていることを否定することを出発点とする理論、ジュディス・バトラー著 竹村和子訳 (1999年)『ジェンダー・トラブル』(青土社)を参照されたい。

と思うだろう。多くの国において、女性がズボンを書くことはもはや特別なことではなくなったのに、スカートを穿く男性はまだ珍しい。そこで、軍人が花柄のスカートを制服として穿くことをおかしく思う人は少なくないだろう。それは慣れの問題であろうか。私はそれだけではないと思う。むしろ、女性が「男性的」な行為をするより、男性が「女性的」な行為をするときに抵抗が強いという現象に基づく反応だと思われる。この現象の重要な要因は、私たちの社会における「ジェンダー・ヒエラルキー」(gender hierarchy)⁷の存在だと思われる。

本稿では上述したような認識に着目しつつ、国際関係論におけるジェンダーの視点の重要性について考察する。まず、ジェンダーに関する用語や概念を解説し、それらの概念を使用する意味を検討する。その後、ジェンダーの視点を取り入れた方法論が、従来、国際関係論で使われてきた方法論とどのように異なっ

ているかを簡単に述べる。本稿の後半では事例研究として、ユネスコが提起した「平和の文化」構想をジェンダーの視点から分析する。

性別、セクシュアリティとジェンダー

では、本論に入る前に、まず基本概念である「性」、「セクシュアリティ」、「ジェンダー」について簡単に説明しよう。裸で鏡の前に立てば、自分の体の「性」の一部が見える。つまり、体の外側にある性器(外性器)が見える。上述したインターセクシュアルやトランスセクシュアルなど以外の人の場合、鏡に映されている外性器を中心に、人間を生物学的に女と男という二つの性に分け、外見的(生物学的)性と心の中での性は一致しているようである。日常生活の中では、鏡に映されている体の性を(少なくとも部分的に)洋服等で隠したりして過ごす。生物学的な性を部分的に隠す必要性、隠し方や隠したあとの様々な行動が私たちの「性」を社会に伝達する手がかりになる。要するに、私たちは日常生活の中で、洋服などを使って、「女」あるいは「男」を演じることによって、私たちの生物学的な性を人に伝えるわけである。この伝え方が「ジェンダー」の一つの意味である。

上述したように、どの社会にも、生物学的な女と男が認識され、いくつかの社会においていわゆる「第三の性」も認識されている。例えば、インドのヒジュラはその例の一つである。しかし、一人の人間には二つ以上の性別は一般的に認められていない。生物学的な類似性に基づく女と男のカテゴリーとは別に、

7 ジェンダー・ヒエラルキーとは、ジェンダーを「男性・女性」という二つに限定したことを前提にして、一つのジェンダーにかかわるものが、もう一つのジェンダーにかかわるものより優れているという認識である。たいていの場合、男性にかかわるものは女性にかかわるものより優れていると認識されるが、状況によっては逆のこともある。男性的なものが女性的なものより上だという認識に基づいて、女性が男性に近づこうとすることは当然なことになるが、男性が女性に近づこうとすると「格下げ」になるので、おかしいと思われる。このことは、社会制度的なレベルでの裏付けは例えば家父長制である。スカートの問題はこのジェンダー・ヒエラルキーにかかわる。また、新たなに職種に女性が進出すると、努力を誉められる一方、反対する声が強い場合もある。ヒエラルキーという秩序の存在そのものに脅威を与えているようにみられ、それが原因であらたな抵抗が生まれるからである。

女や男などを表現するためのルールや演じ方がある。このような歴史や文化の中で社会的につくられた「性」の表現を「ジェンダー」と呼ぶ。これは当然、社会や文化等によって異なっており、性別よりこのような「ジェンダー」による多様性が一般的に認識されているものである。そういう意味で、「性別」についての普遍的度合いが高いということに対して、性別の解釈や表現であるジェンダーには多様性や特異性が一般的に認められつつある。

生物学的な女や男などを基に、それぞれの社会に固有の「女性性・女らしさ (femininity)」と「男性性・男らしさ (masculinity)」が創造され、社会の構成員に伝達される。私たちは、生まれた瞬間からどちらかの「性」をもつ人間として、その性にふさわしい行動を学んでいく。家庭、幼稚園、学校、職場、買い物や遊びの場など、生活のほとんどの場において、外見や生物学的な性に沿って行動する。そのような性に「ふさわしい」行動が社会的に求められると同じに、私たちは自らに対しても期待し、ほとんど意識せずにそういった期待に応えようとする。外見や生物学的な性に合わせて、社会的に「ふさわしい」行動は「ジェンダーの役割」(gender role)⁸と呼ぶ。私たちは常に自らのジェンダーの役割を演じていると同時に、周りの人に対しても

社会的にふさわしいジェンダーの役割を期待するのである。

ここで強調すべきは、「性」と違って、「ジェンダー」という概念はあくまでも社会的につくりあげられたものであり、普遍的なものではないということである。しかし、世界のほとんどの社会は現代において、一般的に男性は家の外で公的な役割を果たすのに対して、女性は家の中にいる、というふうに性(ジェンダー)に基づく役割分担がつくられており、その中で男性性にかかわるものは、女性性にかかわるものより優れているとされている。そうすると、社会的な制度等をつくり、それらを評価するのは主に男性の仕事であり、男性を中心とする社会的な制度や活動は、女性を中心とする社会的な制度や活動より重要であると評価されることが多い、ということになる。評価のしかたは様々であるが、一般的にいうとお金で表すことが多い。そこで、お金を得るといふ男性の生産活動は、子育てなどお金を得ない女性の再生産活動より重要視される傾向がある⁹。また、家庭の中でも家父長制のもとで、男性は社会生活において、女性に比べて法律的にも経済的にも選択の自由が多い。このようなジェンダーによる優先順位(ジェンダー・ヒエラルキー)は社会的

8 英語には sex role という表現が昔からある。Sex と gender の区別ができてくることによって、sex role のほとんどは gender role であるという認識が生まれてきた。日本語では、sex role を性役割(性別役割)と訳し、gender role も性役割と訳す人もいるが、本稿においては、「ジェンダーの役割」とする。

9 子どもを産んだり育てたりすることは社会活動上極めて重要な労働であり、それは金銭的な価値とは異なる次元でも重要である。しかし、再生産活動は金銭的に評価されないことが多い。金銭的な評価を与えると、男の「仕事」よりは低い評価になることが多い。また、女性は子育てや家事と仕事を両立する人が多いが、男性には仕事があるから子育てや家事は部分的にしかできない、とされることが未だに一般的であろう。

な発言力や政治的な権力にもつながる。つまり、女性より男性のほうが公的なパワーにアクセスしやすいということである。パワーへのアクセスがジェンダーによって異なるということから、「ジェンダー」という概念は政治的な概念である、ということもできる¹⁰。

ジェンダー・ヒエラルキーの中で、男性性を優先する立場は「マスキュリニスト」（男権主義者；masculinist）と呼ばれる。性別による役割分担が当然で、しかも男性の仕事は女性の仕事より優先すべきだ、というのがマスキュリニストの出発点であろう。マスキュリニズムは、ジェンダーの役割を狭くとらえるという意味で、ジェンダー・ニュートラル（gender neutral；ジェンダーと関係がなく、ジェンダー化されていないものである）あるいはジェンダー・フリー（ジェンダーの役割に縛られない）な社会を否定的に考えるものである¹¹。

10 社会科学において、フェミニズムが貢献した概念の一つは、「個人的なものは政治的である」（the personal is political；ケート・ミレット 1970）という考え方である。つまり、個人の行為も政治的な意味や意義があるということである。この考え方の根底に、ジェンダー・ヒエラルキーによるパワーへのアクセスの不平等がある。

11 ここでいうジェンダー・フリー（gender free）という社会は、私自身も想像しにくい。あえて想像するならその社会において、図1で示されている選択肢を自由に選び、気が向くまま自由に好きなジェンダーの役割を演じることができる状態であろう。複数のジェンダー役割を選ぶことはもちろんできる。今の社会において男性が演じている役割を女性も演じるようになるという構図ではなくて、男も女も、個人レベルでも社会レベルでも、自由に好きな役割を好きなときに演じることができる社会であろうか。ジェンダー・フリーな社会にはジェンダーの役割そのものがなくなるのではなくて、むしろジェンダーの役割や固定観念による縛りがなくなると考える。

マスキュリニズムが、男性優位な社会を主張するのに対して、現在の社会を基本として、男性中心的な諸制度が「普通」もしくは「ジェンダー中立」であるとし、それらのそのままの継続を主張するのがアンドロセントリズム（男性中心主義者；androcentrist）である。男性の見解がすべての人々（女性を含めて）の見解であり、男性の規範がすべての人々の規範である。これがアンドロセントリズムの出発点である。そうなると、例えば女性はズボンをはいても、男性の規範にあわせていることになるので、それに対する違和感はそれほど強くないであろう。しかし、男性がスカートを穿くと、嫌がる人が多い。上述した例に戻ると、軍人がスカートを穿くことがおかしいと感じるのは、男性を基本にした規範が「普通」のものとして、女性を含めて社会全体に適用されているからである。そういった規範からはみ出しているものをおかしいと感じるわけである。

マスキュリニストあるいはアンドロセントリックである私たちの社会の現状に対して、異議申し立てをしてきたのがフェミニスト（feminist）である。フェミニズムには様々な方法論や理論がある¹²。方法論が違って、どのフェミニズムも女性に焦点を合わせ、不平等なジェンダー・ヒエラルキーの是正や、女性の社会的役割の再評価を含めて、女性にとってより住みよい社会の創造を行動的に主

12 本稿ではフェミニズムについて言及する余裕はない。入門書として、大越愛子（1996年）『フェミニズム入門』（ちくま新書）を参照されたい。

張している。

ジェンダーという「レンズ」¹³

私たちが様々な社会現象を見るとき、これまでの体験などを参考にしながらその現象を理解しようとする。言いかえれば、体験という「レンズ」を通して、重要なこととそうでないことを分けて、重要なことだけに集中しようとする。このようなレンズは、物事を分析するための理論やルールであり、情報処理の道具でもある。誰もがこのようなレンズを通すが、意図的に使う場合と、無意識に使う場合とがある。意図的に特定のレンズを通すと、よりはっきり見えるようになるものもあれば、見えなくなるものもある。たとえば、「現実主義」というレンズを通して国際関係を見ると、国家がはっきり見えてくるが、個人は見えにくくなるであろう。そうすると、国際的な動きを分析するとき、分析の中心に国家を据えて、その関連で物事を分析する。場合によっては、個人が最初から枠組みに入っていないこともあるし、入っていないことに気づかないこともある。分析枠組みは国家を中心にするものだから、個人に目を向ける必要がないということが前提で、何もかも重視したら分析できなくなるという議論はもちろんある。ここでは、どのレンズがいいかという議論ではなくて、レンズを通すと一つのこ

とに敏感になるということを強調したい。敏感になるとよく見えてくることもあるし、見えなくなることもある。

このことは、ジェンダーというレンズを意図的に通すときにもある。ジェンダーのレンズを通していなければジェンダーのことが見えにくいのだが、通していると逆に敏感になりすぎることもある。しかも、ジェンダー関係のレンズは複数ある。例えば、一つのジェンダーが見えてくる場合、二つ（あるいは複数）のジェンダーが見えてくる場合、本来見えていないジェンダー関係が見えてくる場合などがある。同時に、一つのジェンダーに着目した結果、他のジェンダーが見えにくくなることもある。そういう意味で、レンズを通す意図だけではなくて、レンズの種類によって見えてくるものと、見えなくなるものが異なってくる。

もちろん、私たちは常に複数のレンズを通しており、必ずしも使用中のすべてのレンズを意識するとは限らない。例えば、どのような社会現象を見る場合も、私たちは「ジェンダー」というレンズを通してているが、それはほとんど無意識のうちに使っているのである。例えば、「ジェンダー」のレンズを通して「仕事」を見ると、男の仕事・女の仕事が見えてくるが、一般的にそれが現状として見えて、見る度にジェンダー分析をするわけではない。しかも、無意識にジェンダーのレンズを通している場合、対象にしようとしている事象にはジェンダーは関係していないと判断することが多いのである。その結果、たと

13 ここでいう「ジェンダーのレンズ」は、英語でいう「gender sensitive lens」のことである。ジェンダーという「レンズ」を通すと、ジェンダーに関することがよりはっきり見える反面、他のことがボケて見える可能性もある。

えば国際関係論で取り上げるほとんどの課題——安全保障、国家権力、環境破壊、人権など——は、客観的で「ジェンダー・ニュートラル」であり、ジェンダーの視点は関係ない、とされる。しかし、前述したように、このような「ジェンダー・ニュートラル」のほとんどは、むしろ「マスキュリニスト」あるいは「アンドロセントリスト」のジェンダーのレンズを使っただけの判断である。このことがもっともよく見えてくるのは、フェミニストのレンズを通してのときであろう。では、意図的にジェンダーのレンズを使用するためにはどうすればいいか。まず、それぞれの概念を確認しよう。

**ジェンダーの視点で見えてくるものは何か：
ステレオタイプ、二元性や不可視性**

ここでは、ジェンダーの視点を取り入れることによって、新たに見えてくるものについて考えてみたい。論をすすめるにあたって、ジェンダーに関するステレオタイプと合わせて、「女」「男」という二元性（duality）およびジェンダーに関する不可視性（invisibility）の意味という二つの側面に焦点を絞ることにする。

まず、ジェンダーに関するステレオタイプの意味をみてみよう。辞書によると、ステレオタイプとは、「きまりきった形式・方法、紋切り型」である。「きまりきった」という言葉には単純化されたという意味が含まれており、複雑な現実を単純化してとらえることである。そのようなステレオタイプからでき

るイメージは、複雑なグループでも単純なものになってしまう。そのためグループ内の多様性や矛盾、ステレオタイプと異なるところなどが見えにくい。「単純でわかりやすい」ということは、ステレオタイプが成り立つ原因でもある。

ジェンダーに関するステレオタイプは単純に言えば、ジェンダーの役割を「きまりきった形」のものにしてしまう。たとえば「男の子は泣かない」とか「女の指先は器用」など、例は数多くある。男を表現する形容詞は、力強い、理性的、合理的、遅いなどが一般的であるのに対して、女を表現するものとしては、力が弱い、依存心が強い、繊細、感情的、やさしいなどという言葉が一般的であろう。日本での実生活においては、甘いものを食べるのは男らしくないとか、ポークカツレツを食べるのは女らしくないなどの例がある。（これらの考え方は文化によってかなり異なる）。これらのステレオタイプが家庭、学校、マスコミ、テレビ等、私たちの生活のあらゆる場面に浸透しているために、私たちはジェンダーがはっきりわからない人に出会うと不安になりがちであり、「あの人はこちらか」と話題にしたりすることもある。また、日常生活の中で書類に記入するとき、必ずといっていいほど性別欄がある。しかし、その書類の目的を達成するために性別を明確にする必要がはたしてあるだろうか。あるとすれば、それは主に社会的なジェンダー観を強化するということであろう。

以上のように、ジェンダー・ステレオタイ

ブには「男」「女」という二つのイメージがある。しかし、もう一つのステレオタイプは、「女でないものは男である」「男でないものは女である」という二項対立的な分け方である。最近の日本においては、「男」「女」という役割の範囲が少し広がってきており、境界線も見えにくくなっているところがあるように思われる。しかし、中身はともかくとして、社会生活を行なうために、どちらかの役割（女あるいは男）を選ばなければならない。上述したように、生物学的に男でも女でもない人があることは事実であるが、この人たちも男か女か、場合によっては第三の性というジェンダー役割が押し付けられる。ジェンダー役割において、今日は「男」をやって、明日は「女」をやってみようという生き方は、一般的に受け入れられないものであり、どちらでもないという役割を社会に受け入れてもらうのはさらに難しいだろう。

定義はともかくとして、一人一人の人間は男性的なものも女性的なものも有しており、生活の中でそれぞれを個人の都合や好みによって使い分けたりする。しかし、ジェンダーを語る時、二つのジェンダーは二つのカテゴリーに分類され、共通性よりも違いが重視される。その結果、それぞれのカテゴリーの中の多様性（色々な女性も男性もいること）も、二つのカテゴリーの共通性（やさしい男もやさしい女もいる）も見えにくくなる。また、ジェンダー・ヒエラルキーにおいては、一般的に「男性的」なものが「女性的」なものより優先され、評価される。このため、男と

女は対等な二項対立的な概念ではあっても、それが社会的役割として表現されるとき、対等な二項対立ではなくて、男性優位な二項対立となる。また、この構図のなかでそれぞれのジェンダー・カテゴリー内の多様性が不可視であるために、それぞれのステレオタイプを中心とするものが重視され、はみ出しているものが軽視される。これは「ジェンダー」という概念の限界の一つである。

以上により、様々な社会現象は、直接的に性別あるいはジェンダーに関係していなくても、結局はジェンダー化され、ジェンダー・ヒエラルキーの存在によって意味付けられる、ということが明らかであろう。また、アンドロセントリックな社会的評価によって、本当は男性化されたものであるのに、それが「ジェンダー・ニュートラル」のものともみなされる。図1でいうなら、X軸とY軸が合う点を示すのであり、性別にも「らしさ」にも関係がないものと見なされる。ある社会現象に本当はジェンダーが関係しているのに、ジェンダーは関係していないとされるのは、ジェンダーが不可視になっていることを意味する。例えば、初期の人権に関する考え方や法律などは特定の階級の男性がそれ以外の男性に通用するために作られたものである。そういう意味で、最初からある種のバイアスがかかっている。そのバイアスの意味についての解釈は別にして、人権という分野は対象としてジェンダーと関係するが、概念としての「人権」はジェンダーと関係していないという主張ができるのは、その概念の形成過程におけるジェ

ンダー化された側面が不可視となっているからである。また、個人レベルでいうと、デートの時にアイスクリームを注文しない男性はただ単にアイスクリームを食べたいと思っていないからの場合もあるだろうが、日本でそういうときに甘いものを食べるのはよくないという目に見えないジェンダー圧力も働いているケースが多い。この場合もジェンダー化が不可視であろう。

ここで問題となるのは、不可視となっているものが見えないだけではなくて、多くの場合、「見えない」ということは「見なくていい」と判断されることである。ジェンダーは不可視であるために、見逃されるばかりではなくて、見逃してもかまわないと意味付けられるのである。法律、政治、国際関係論などの分野におけるジェンダー分析の必要性についての是非も、社会科学がもつジェンダーの不可視性が認識されずに進められることが多いため、ジェンダーの視点の重要性が認められない結論になりがちである。

従来の国際関係論とどこが違うか

では、ジェンダーの視点を取り入れると、何が見えてくるであろうか。一つは、今まで見えていなかった「ジェンダー化」が見えてくる。もう一つは、物事を二項対立的に分けることの限界も見えてくるであろう。つまり、ジェンダーの視点を取り入れると、女と男に分けるだけではなく、それぞれの中身や、女と男の間のグラデーションまでも見える可能性がでてくる。このことを広く解釈すると、

国際関係論が対象とする様々なアクターも、複数のアイデンティティを有しているということが見えるようになるであろう。

ここでは、ピーターソンとラニャン（1983年）の手法を借りて、国際関係論を三つの角度から簡単にみてみよう。まず、国際関係論をどう評価するかということからはじめよう。これまで見てきたように、国際政治の規範の多くはジェンダー・ニュートラルとされている。ある現象を分析するとき、どの方法論を採用しても、規範を前提にするであろう。たとえば、パワーはジェンダーと関係していないというふうに考えるならば、パワーに関する分析にはジェンダーの視点を入れなくてもいいであろう。例えば、G8の指導者のなかに女性がないのかという問いに答えるには、ジェンダーとパワーについて考えなければならない。そこで、ジェンダーの視点を取り入れると、パワーへのアクセスはジェンダーによって違うということか、ジェンダーによってアクセスできるパワーの種類が違うということか、それとも問題はまったく別なものなのか。こういったことを考えるようになるであろう¹⁴。

次に、国際関係の諸現象をどのように分類し、どのように概念化するか、ということを検討してみよう。私たちが普段使っている言

14 国際政治に使われるパワーの概念は主に「支配するためのパワー」(power-over)を意味する。しかし、別のパワーのとらえ方だと、例えばpower-withなら、協力的なパワーを想定しているために、女性には比較的アクセスしやすい場合もある。ジェンダーの視点を入れて分析しないと、「普通」のパワー=power-over=男性という仕組みに留まってしまう。

葉や概念には、ジェンダーの影響がある。たとえば、上述したアンドロセントリックな二項対立的な考えかたによると、「男性的」なものが「女性的」なものより優先される。「男性的」だとされる合理性が、「女性的」だとされる感情性より重要だと評価されるわけである。しかし、合理性は果たしてどこまで徹底できるか。核兵器使用に関する議論の中で、国家が核戦略を合理的に展開する、という前提がある。「男性的」な国家が、「男性的」な合理性にもとづいて行動するというのは現実的な理想なのか、それともアンドロセントリックな幻想なのか。ジェンダーの視点を取り入れることによって、後者であるとわかるであろう。

最後に、国際政治をどう動かすかを少しみてみよう。今まで見てきたように、政治活動や仕事など、家の外での生産活動には男性が活躍し、家庭の中での再生産活動には女性が活躍する、というジェンダーによる役割分担が一般的である。また、ジェンダー・ヒエラルキーによって、多くの場合、生産活動が再生産活動より価値が与えられ、重要視される。与えられるお金も違うし、役割分担としても違う。(女性が社会に出ることはあるが、男性で家庭内で「専業主夫」を選ぶ人はあまりいない)。このことは、国家の枠組みでも発見できる。例えば、経済成長が社会福祉より優先されるという現象をつくりだす要因の一つとして、ジェンダー・ヒエラルキーを指摘できる。

このことはさらに国際的に再生産されてい

る。例えば、国際援助の場において、男性を中心とするプロジェクトが女性を中心とするプロジェクトより優先され、男性を中心とするプロジェクトは「普通」で、女性を中心とするプロジェクトは「特別」ということになろう。¹⁵ ジェンダーの視点を取り入れると、このような歪みが見えてくる。

しかし国際関係をジェンダーの視点から分析し、それに基づく方法論を取り入れることによって、すべての国際問題が解決できるとは考えていない。また、ジェンダーの視点があれば、他の視点(たとえばエスニシティ、階級・階層等)は必要ないという意味ではない。さらに、ジェンダーの視点によってすべてが見えてくるということを主張しているわけでもない。むしろ、ジェンダーの視点を取り入れると、西洋的なジェンダー・バイアス、しかも「裕福な白人ビジネスウーマン」のバイアスがかかってしまう危険性もある。しかしながら従来、「ジェンダー・ニュートラル」と思われた事象をジェンダーの視点から分析することによって、その事象の新たな側面が見えてくる。これは、新たな知識創造や社会変容(transformation)¹⁶への第一歩となる

15 女性と開発については、キャロライン・モーザ著久保田賢一・久保田真弓訳(1996年)『ジェンダー・開発・NGO: 私たち自身のエンパワーメント』(新評論)を参照されたい。

16 ジェンダーの視点をとり入れることによって、もう一つの変容的な側面はその関係性から生ずるものである。二つのジェンダーの間には相互依存関係がある。そのため、女性あるいは男性に着目することによって、そのジェンダーについての知識を増やすことだけではなく、他方のジェンダーについての考え方を変革することになる。

可能性があるからこそ、私はジェンダーの視点の導入を進めている。

さて、実際にジェンダーの視点をとり入れることによって、何が見えて、何が見えなくなるか。このことをさらに深く考えるために、次に「平和の文化」構想を事例研究として具体的に見てみよう。

II ミニ・ケース・スタディ：平和の文化構想

1997年11月20日に、国連総会が「平和の文化に関する宣言」(Declaration on a Culture of Peace; UN Resolution 52/13)を採択し、2000年を「平和の文化の国際年」(Resolution 52/15)として設定した¹⁷。本稿の紙幅に制限があるため、これらの決議案のうち、「平和の文化に関する宣言」のみを取り上げ、この宣言をジェンダーの視点から検討する意義について論じるにとどめよう。まず宣言を概略してから、先ほど使用した分析法、すなわち規範、分類・概念、組織・動かし方、という三つの観点から同宣言を分析する。

「平和の文化に関する宣言」

「平和の文化に関する宣言」は、平和の文化構想の由来や意義(前文)、平和の文化の意味、意義や目指すもの(第1条から第3条)および平和の文化促進のための主なアクターおよびその活動範囲(第4条から第11条)と前文および11の条項によって構成されている。前文では、平和か戦争かという二元論的などらえ方ではなくて、直接的暴力も構造的暴力もともに「平和」の対象にしており、差別、貧困など、すべての暴力からの解放を呼びかけている。さらに、「戦争と暴力の文化から平和と非暴力の文化」へと移行する必要性を訴えている¹⁸。

宣言は平和の文化を一連の価値観、態度、伝統、行動様式および生活様式として定義し、それらの中に、人権や生命に対する尊重、すべての形態の暴力に対する否定、世代を超える自然環境保全に対する義務、男女平等、すべての人々の権利として言論などの自由、民主主義、多元主義、文化的多様性や国家・民族・エスニック集団・宗教集団・文化集団・個人の間における対話などが平和の文化の担い手の義務として明記されている(第1条)。このような平和の文化は、変容的(trans-formative)なものであり、とくに暴力的競争から平和的協力への変容が強調されている(第2条)。価値観や行動の変容、貧困や貧富の差の撲滅、女性の政治的経済的エンパワーメント、文化的多様性に対する理解等の促進

17 1998年11月10日に、2001年から2010年の10年間を「世界の子どもたちのための平和の文化および非暴力のための10年間」(International Decade for a Culture of Peace and Non-violence for the Children of the World; Resolution 53/25)として設定し、平和の文化に関する宣言を実行するために、「平和の文化のための行動綱領」(Declaration and Programme of Action on a Culture of Peace; Resolution 53/31)という決議案を起草した。

18 平和の文化に関する宣言(日本ユネスコ協会連盟事務局仮訳、<http://www.unesco.or.jp/peace/sengen.htm>, 1999.11.08)

といったものが平和の文化の目指すものとされている(第3条)。そして、これらの目標達成には、国家(第5条)、市民社会(第7条)、マスコミ(第8条)、「人々の心に直接的な影響を与える人々」(第9条)、「学術、哲学や創造的活動に従事する人々」や国連など、様々なアクターの参加を呼びかけている。なお、手段として、教育のほかに、社会運動や市民運動が強調されている(第4条)。

ジェンダーの視点からみた平和の文化に関する宣言

平和の文化に関する宣言は、人権のなかでも男女平等や女性の社会参加を明記している。このことは、従来の国際関係論の分析法の観点からでさえ注目に値する。しかし、ジェンダーの視点をを用いると、その男女平等の意味をさらに掘り下げて考えることができる。手はじめに、先ほどみてきた「規範」の文脈で考えてみよう。

平和の文化に関する宣言のもっとも重要な目的は、暴力をなくすことであろう。意図的にジェンダーの「レンズ」を通して暴力という概念(あるいは暴力に関する規範)を見ると、そういった概念や規範のジェンダー化された性質が見えてくる。国家のレベルで考えると、まず戦争や軍隊のことが思い浮かぶだろう。暴力を戦争や軍隊の文脈でとらえると、それに参加する人(軍人)、決定する人(政治家や将軍など)のほとんどが男性である。

また、国家や軍隊が組織化し、正当化する性暴力(例えば日本軍慰安婦など)において

も、提供する人は女性であっても、決定者、企画者、利用者などは男性であろう。

暴力を個人のレベルで考えた場合、性暴力や家庭内暴力などがある。これら暴力的犯罪の加害者のほとんどが男性である。また、映画など大衆文化の中で登場する暴力の多くは男性の手によるものである。このような環境の中にいると、暴力と男性が結びつきやすくなり、暴力を振るう男性というのが当たり前になる。さらに「男性は性欲を抑えることができないので、性暴力はある程度やむを得ないものであり、女性が誘うから悪いのだ」という考え方がある。男性は生物学的に自らの性欲を抑えることができないので、社会的な役割のなかでそれを抑える必要がないことになっているのか。ジェンダーの視点を入れて分析すると、社会の中での男性の役割や男らしさと、これらと性や暴力に関する規範との関係が見えてくるだろう。

また、このような「暴力的男性像」に対して、女性は子どもや環境にやさしく、暴力を振るうどころか、その暴力の犠牲者として描かれることが多い。男性が暴力の象徴であるとすれば、女性は母性愛や優しさの象徴であろう。しかし、実際に見てみると、やさしい男性がたくさんいると同時に、暴力を振るう女性(たとえば子どもを虐待する人)もいる。しかも多くの場合、「暴力的」な男の子たちを育てているのは「やさしい」女性たちであろう。女性に対する規範もジェンダー化されていることは、ジェンダーの視点を取り入れると見えてくるのである。

私たちは一般的に「暴力の文化」の担い手は男性であると考えるのであろうが、「平和の文化」の担い手は女性だけかと言えば、そうではない。それは、女性が政治的な権力をもっていないからであろう。そこで、平和の文化に男性の参加を期待するためには、暴力をジェンダー化された概念とみなし、男性に新たなジェンダー役割ができるように、環境づくりをしなければならない。同時に女性は政治の世界で活躍しないという考え方を変えなければならない。家庭の中では大きな役割を果たしても、戦闘における平和交渉に女性が登場してくるのは「女性」というステレオタイプに反する。しかし、女性は現在平和づくりに大きな役割を果たしてきている¹⁹。このようなジェンダー・ステレオタイプをなくす必要性は、ジェンダーの視点を取り入れなければならないことの一つであろう。

では、分類化・概念化において、平和の文化をジェンダーの視点から見ると何が見えて

くるだろうか。ここでは二つの側面を指摘する。まず、平和の文化は概念として非常に広く、直接的な暴力も構造的な暴力も含んでいる。直接的な暴力には、「暴力イコール男性」という一般的なイメージに問題がある。しかし、構造的暴力は人種主義や貧困など、様々な社会的問題がその範疇に入る。貧困をとりあげて見ると、性差別や、性を理由とする社会的な排除、社会参加における機会の不平等などによって、男性よりも女性の状況が深刻になりやすい。さらに、このような不平等な構図の中で構造的暴力が再生産されることはいうまでもない。このような問題を解決するには、様々な政治的経済的過程から排除されている女性たちの声に耳を傾けることが不可欠である。

もう一つの側面は、暴力の分類化の問題である。平和の文化を実現するためには、あらゆる形態の暴力を分類化し、それぞれの暴力の原因を追求したうえで解決の方法を探ることが必要である。最初の分類化や原因の設定が妥当でなければ、問題を解決することはできなくなる。「性暴力」という分類は、ジェンダーと深い関係があるにもかかわらず、性暴力に関する分析はかならずしもジェンダーの視点を取り入れているとはかぎらない。ジェンダーの視点は、その根底にあるジェンダー・ヒエラルキーを究明するものである。表面的にジェンダーに着目するだけならジェンダーの視点とは言えない。

このことを考えるために、パプア・ニューギニア (PNG) の例をみてみよう。PNGで

19 平和をつくる女性の事例については、たとえば Ingeborg Breines, Dorota Gierycz & Betty Reardon, eds. 1999. *Towards a Women's Agenda for a Culture of Peace*, UNESCO, Part III: Women's Actions and Initiatives for Peace. パプア・ニューギニア (PNG) のある紛争では、国旗がデザインされているシャツを着た女性たちが戦場に出てきて、国旗を立てて、両陣営に人参、キャベツや飲み物などの物資と若干のお金を渡し、紛争を止めるようによびかけて、成功した。珍しいケースではあるが、女性によって平和が作りだされたといえよう。Alan Rumsey, "Women as Peacemakers: a case from the Nebilyer Valley, Western Highlands, Papua New Guinea," in Sinclair Dinnen & Allison Levy, 2000 *Reflections on Violence in Melanesia*, Leichardt: Hawkins Press and Asia Pacific Press, pp.139-156.

は、1980年代頃から性暴力が大きな問題として表面化してきており、場所によっては結婚している女性の90数パーセントは性暴力を受けたことがあるという²⁰。これには近代化による伝統社会の崩壊やアルコール・薬物依存症など、複数の原因がある。そのなかできわめて重要な要素は、開発によるジェンダー役割の変化である。女性が少しずつ現金収入を得るようになった一方で、男性の失業がますます目立つようになってきた。また、西洋的な家族法や家庭に関する概念が、伝統的な家族のあり方や問題解決方法に矛盾していることが多い。開発の副産物として男性のストレスが増大し、その結果、性暴力が増えているという説もある。開発問題をジェンダーの視点から分析すると、こういった問題が把握しやすいと思われる。しかし、西洋的なバイアスがかかっているジェンダーの視点を使うと、「性暴力」というものの定義やそのとらえ方の文化的な違いなどが見えなくなる危険性もある。これは、ジェンダーの視点の重要性を示す一方で、その限界をも示している事例である。

最後に、平和の文化を支え、それを実現していくものをみてみよう。平和の文化に関する宣言によると、平和の文化の実現には国家も市民社会も大きな役割を果たすべきである。

20 Christine Bradley, "Why Male Violence against Women is a Development Issue: Reflections from Papua New Guinea," in Miranda Davies, 1994 *Women and Violence: Realities and Responses Worldwide*. London: Zed Books, pp.10-16. PNGの性暴力については、ibid. (Sinclair Dinnen & Allison Levy).

しかし、どの社会をみても、政治や経済の場においてリーダーシップをとっている女性の数は少ない。市民社会やNGOを見ても、参加している女性が多い場合でもトップに立っている女性は比較的少ない。たとえば、日本の場合だと、女性の国会議員は全体で68人しかいない。また、日本の企業において、上場企業における女性役員の比率は0.25パーセントにすぎない²¹。平和の文化に関する宣言は男女平等や女性の社会参加をうたっているが、女性が参加しにくいジェンダー・ヒエラルキーに対する取り組みなしには女性参加の拡大は難しいであろう。また、女性の参加を拡大することは、ある意味で男性の参加を縮小することになる。女性の参加にのみ着目し、参加ができなくなる男性の問題に目を向けなければ、一つの問題が仮に解決できたとしても、新たな問題を生むことになろう。こういった問題を、はじめから両方のジェンダーの立場から分析することによって、より平等で自由、ジェンダーに縛られない社会の創造に目を向けることができるであろう。

まとめ

平和の文化を実現するには、教育、平和の創造（暴力・紛争予防）および平等な社会参加という三つの分野における成功が必要であろう。これらの分野にジェンダーの視点を

21 国会は衆議院の議員500人中25人、参議院の議員251人中43人(2000年4月11日現在)。女性役員比率は、東洋経済新報社第二編集局データバンク三部「上場会社役員動向調査」より。
<http://www.toyokeizai.co.jp/data/shikiho/executive.html> (2000.04.11)

取り入れると、今までと違う「現実」が見えてくる。つまり、ジェンダーの視点の出発点として、それぞれの分野で尺度として使っている規範や、それらを裏付ける概念や分類そのものがジェンダー化されているのである。しかも、それらの概念等を前提とする社会制度もジェンダー化されており、そこで起こっている様々な事象もその影響を受けているのである。なかでも、とくに言及すべきは暴力に関する考え方や制度である。暴力がジェンダー化されていることを認識することによって、暴力概念の再構築が可能になる。その再構築の過程において「男性」および「男性性」と「暴力」を切り離すことが可能になるはずである。そこで、平和の文化の創造ももちろんのことだが、例えば戦争や紛争に使われる「暴力」の概念も豊富になるために、新たな解釈や、紛争防止方法などが可能になるかもしれない。

平和の創造や紛争予防においては、武力による平和維持に取って代わる、非暴力的な平和づくりが必要である。そこに男性を積極的に組み込むと同時に、そういった平和づくりの過程に女性の参加も促す。社会参加においては、前述したとおり、現在の社会のジェンダー役割分担をもとに、男性の分野に女性の参加を増やすだけでは、真の平和の文化を創造することはできない。平和の文化を創造するには、二元論的にジェンダー役割を見るのではなく、さらに多元的な役割を考える必要がある。これにはいうまでもなく、大きな社会変容が必要である。

本稿のはじめに述べたように、私たちはみな、何らかのレンズを通して世界を見ている。ジェンダーのレンズを通している人もいれば、エスニシティのレンズを通している人や現実主義のレンズを通している人もいる。ジェンダーのレンズを通すと、今まで見えてこなかったことが見えてくる。しかし、ジェンダーのレンズを通していう意識をしなくても、見えている世界は実はジェンダー化されたものである。それは、ジェンダーという社会的分類が社会活動の根幹に強い影響力を有しているために、ジェンダーが様々な事象に影響を与えているからである。上述したように、国際関係論におけるジェンダー化の実態や過程はほとんど不可視であり、日本ではこのことはほとんど論じてこなかった。国際関係論の分野において、ジェンダーの視点を取り入れなければ研究ができない、ということではない。また、ジェンダーの視点を積極的に取り入れることによって研究がよくなるとは限らない。むしろ、本稿のプロローグで示したような混乱が起こることもあり、研究がさらに難しくなることもあるであろう。しかし、ジェンダーの視点を取り入れていないために、論じてこなかったことについて論じる必要があるかどうかを判断することは、ジェンダーの視点を取り入れてはじめてできるようになる。その結果、見る必要がないという判断も出てくるだろうが、その判断を下す過程において議論が豊かになるであろう。

私は、議論や概念の幅を広げるという意義においてだけでも、ジェンダーの視点を取り

入れる意義があると考えます。しかし、さらに私は社会変容を求める研究者として、そして運動家として、ジェンダーの視点を取り入れることによって、より平和的な社会づくりに貢献できると考える。

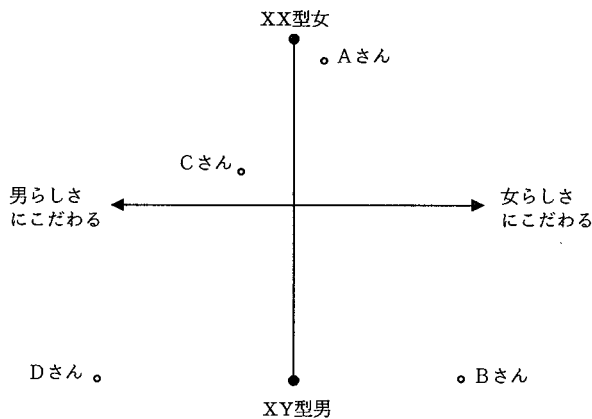
図1 性別、「らしさ」とジェンダーに対するこだわりの関係性

図1は(a)、(b)、(c)の三つの図によって構成されており、各図に例として、同じ4人(A,B,C,Dさん)の状態が示されている。三つの図によって、「性別、『らしさ』とジェンダーに対するこだわりの関係性」を示すのが目的である。

解説

1. 社会の影響はいつでも受けるが、私生活においての自分の「本音」と家庭や職場など社会の中にいる自分の「建前」とは区別する。
2. 図1(a)は「本音」を表しているのに対し(b)は社会の要求を受けた個人の「建前」を表している。さらに(c)は(b)を受けてのもので、生物学的な「性別」を自己が決定する「性別」に変えたものである。
3. X軸の真ん中の点は「らしさ」に全くこだわらない状態を表している。
4. Y軸の真ん中の点は男でも女でもない状態を表している。
5. 便宜的に2次元で二つのジェンダーを表しているので、図の上ではジェンダーの二項対立になるが、「女性」でなければ「男性」という意味ではなくて、「女性」「男性」とは異なるジェンダー・アイデンティティをもつ人たちは、より真ん中の方に位置することになる。
6. 自らの位置は主観的なものであり、時間、状況、気分などによって変わるものであるが、この図ではとりあえずの地点を示している。
7. 本当の意味での「ジェンダー・フリー」は、「らしさ」が存在していてもそれに縛れることがなくなる。つまり社会の期待や要求がなくなり、個人の好みや気分で判断することになる。

図1(a) 遺伝子を「性別」の基準に自我で自らの「らしさ」を表現するとき（本音）

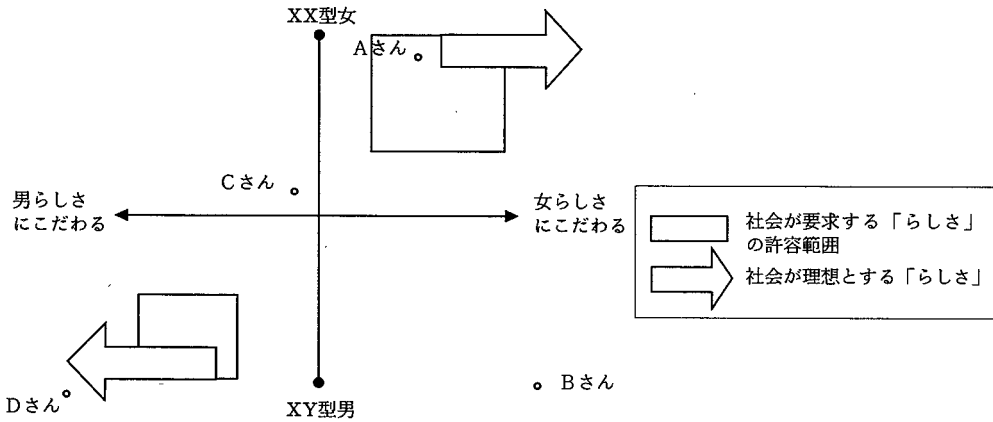


解説

例として、4人の状況をそれぞれの図で説明する。どれもある意味でステレオタイプである。ジェンダーと性別の関係性を見るのが目的である。

- Aさん：自らはXX型「女」だろうと思っている(検査はしたことがない)。幼時以来、外見、行動などを基準にすると、男か女かわからないような行動的タイプ。
- Bさん：XY型「男」だが、性転換手術済み。社会的、身体的女らしさに非常にこだわる。
- Cさん：XXO型「女性」。どちらかといえば、少々男らしく見せたい。
- Dさん：絶対にXY型「男」でなければ困る。「男性」に徹底したい。

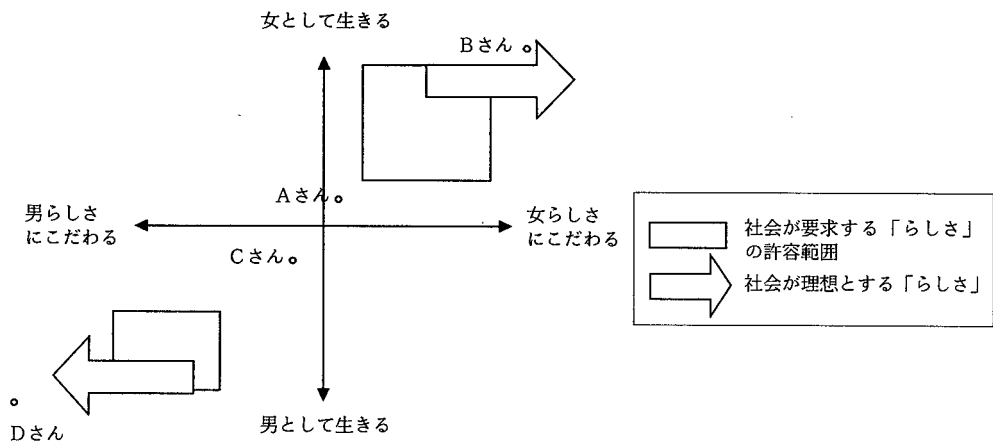
図1(b) 遺伝子を「性別」の基準に社会が求める「らしさ」に応えようとするとき(建前)



解説

社会の要求を受けて、この中でもっとも応えようとするのはAさん。「本音」のときより少し「女らしさ」にこだわりを見せる。Bさん、Dさんはすでに「らしさ」にこだわっているので、あまり変わらない。Cさんは生物学的にどちらでもないで、「らしさ」に対するこだわりはもともと強くない。この場合はとくに大きな変化は見せない。

図1(c) 個人の自己申告を「性別」の基準にして社会が求める「らしさ」に応えようとする「建前」



解説

性別に対する基準は生物学的な根拠から自己決定に変わる。

- Aさん：もともと生物学的な「性別」にも「らしさ」にもそれほどこだわっていない。「らしさ」の度合いはそれほど変わらないが、「女性として生きている」位置は真ん中へ移動する。(少し左下へ)。
- Bさん：完全に位置が変わる。女性として生きていることを重視しているので、かなり右上へ移動する。
- Cさん：どちらかという男として生きることに決めている。少しばかり左下へ移動する。
- Dさん：男に徹底したい。さらに左下へ移動する。

主な参考文献

(和文)

- 江原由美子ほか 1997『ジェンダーの社会学:女たち／男たちの世界』新曜社
- 大越愛子 1996『フェミニズム入門』ちくま新書
- キャロライン・モーザ著、久保田賢一・久保田真弓訳 1996『ジェンダー・開発・NGO:私たち自身のエンパワーメント』新評論
- ケート・ミレット著、藤枝滯子ほか訳 1985『性の政治学』ドメス出版
- 橋本秀雄 2000年『性のグラデーション——半陰陽児を語る』青弓社
- 吉永みち子 2000『性同一性障害：性転換の朝』集英社新書

(英文)

- Abelove, Henry, Michele Aina Barale & David M. Halperin, eds. 1993. *The Lesbian and Gay Studies Reader*. New York: Routledge.
- Breines, Ingeborg, Dorota Gierycz & Betty Reardon, eds. 1999. *Towards a Women's Agenda for a Culture of Peace*, UNESCO
- Bulbeck, Chilla 1998. *Re-orienting Western Feminisms: Women's Diversity in a Postcolonial World*. Cambridge University Press.
- Davies, Miranda 1994. *Women and Violence: Realities and Responses Worldwide*. London: Zed Books.
- Butler, Judith 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge.
- Dinnen, Sinclair & Allison Levy, 2000. *Reflections on Violence in Melanesia, Leichardt*: Hawkins Press and Asia Pacific Press.
- Enloe, Cynthia 2000. *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*, Berkley: University of California Press.
- Peterson, V. Spike and Anne Sisson Runyan 1993. *Global Gender Issues*, Boulder: Westview Press.
- Sen, Amartya. 1999. *Development as Freedom*, Anchor Books.
- Steans, Jill 1998. *Gender and International Relations: An Introduction*, Cambridge: Polity Press.

The Meaning of Taking a 'Gender Perspective' in International Relations

Ronni ALEXANDER*

Abstract

In Japan, the idea of taking a gender approach to international relations is still quite new. The objectives of this paper are to introduce some of the terms and concepts necessary for a gender approach, and to demonstrate how a gender perspective differs from the more traditional perspectives generally taken in IR in Japan.

The paper is composed of three main sections. The Prologue addresses some of the difficulties inherent in taking a gender approach. Part I, 'The Implications of Taking a Gender Perspective' looks at some of the basic concepts necessary for a gender perspective and discusses some of the differences a gender perspective makes to the study of international relations. Part II is a small case study that examines the Culture of Peace concept from a gender perspective.

This paper was first published in a very short form as a chapter of a book in Japanese entitled *Paradigms of International Relations*. In the time between publication of that chapter and publication of the present paper, the contradictions inherent in the idea of 'gender' had become clear to the author. The first section of the present paper is thus an attempt to deal with some of those contradictions. The discussion focuses on the limitations of conceptualizations of sex and gender as dichotomies, rejecting the idea that all people fall into categories of either 'women' or 'men,' regardless of whether these categories are established on the basis of gender or on that of sex. The assertion is made that if these categories are to be used, the content should be based on personal choice, with recognition of the legitimacy of people who

* Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.

might reject both categories, and others who might choose both. If we are to have these kinds of categories, we must also establish new ones thereby increasing the number and range of choices.

The rejection of 'gender' as a dualistic category makes the discussion of a gender perspective in IR problematical. This question is resolved in the present paper by the recognition that regardless of who in fact comprises the category of 'women,' the members of that category are subject to various restrictions on their freedoms, both personally and because of social factors that discriminate against, or exclude women. For this reason, it is meaningful to look at gender considerations, keeping in mind that there should be freedom in terms of who opts to be included in the categories of 'women' and 'men.'

Having established a way to proceed without complete self-contradiction, the remainder of the paper looks at how ideas of gender can be worked into what is generally considered the 'gender-free' field of international relations. Part I begins with a discussion of basic concepts such as sex, sexuality and gender. It then goes on to discuss the meaning of using a gender-sensitive lens to look at IR. Use of a gender-sensitive lens allows one to focus on gender concerns, identify gender concerns where they were not previously recognized and become aware of gender biases underlying supposedly 'gender-free' or 'gender-neutral' institutions. At the same time, focusing on gender, or on a particular aspect of gender, means that other aspects might become out of focus or blurred. The problem of stereotypes, dualities and gender invisibility are addressed in this section. Finally, the paper borrows from Peterson and Runyan (1993) in looking at three aspects of IR that change when seen from a gender perspective. The first is the question of how normative concepts in IR such as power change with a gender perspective. The second deals with how the various phenomena chosen for study are selected and conceptualized. The third focuses on how international politics are carried out, and by whom, and relates this to gender hierarchies.

Part II of the paper is a short case study on the idea of a culture of peace, as set forth by the United Nations in the Declaration on a Culture of

Peace in 1997. The UN designated the year 2000 as the International Year of the Culture of Peace and the first decade of the century as the International Decade of the Culture of Peace. This section looks at the Declaration from a gender perspective. While the Declaration calls for equality between women and men, examination from a gender perspective reveals the need to look at the way violence is conceptualized, both at a personal level, as well as that of society and the international community. Exploration of this idea reveals the way in which violence is a gendered concept, and suggests that in seeking formation of a culture of peace, it is necessary to address these gendered constructions of violence. In particular, changes in education, peace building and social participation are essential for the creation of a culture of peace.

The paper concludes that while a gender perspective is certainly not the only possible perspective for IR, and is not necessarily the most appropriate perspective for all aspects of IR, it is useful in adding dimensions that have previously been invisible. It is asserted that a gender perspective is an essential element in the process of transformation toward a more equal and peaceful society.